

10月17日(火)から、2年ぶりに友人ご夫妻と一緒に旅を楽しみました。友人は「山爺」と自称されています。故郷の山々を踏破しておられますので、「仙人」といってもいいでしょう。信州信濃の山奥のそのまた奥の、秘境の秘湯の隠し湯を予約してくださいました。



上信越道の松代 PA で待ち合わせました。松代に着くと PA の横に小高い丘があり、麓に「真田十萬石の城下町『松代』」の立派な立看板がありましたので、櫓が立つ丘の上まで登ってみました。ここは川中島合戦(1553-1564)の布陣を示す石の広場でした。戦国大名の信玄(1512-1573)は甲州人。信州信濃の山奥の果ての越後の大名謙信(1530-1578)の領域まで領地を求めたのか、と驚きました。欲深いものです。



松代 PA は千曲川改修の残土による盛土で出来ていて、直ぐそばを千曲川が流れています。川中島合戦は12年も続いても、決着はつかず、疲弊させる無駄な戦だったのではないかと思います。松代はそれだけに歴史の重みを持った場所ではないかと思いました。

松代 PA で山爺ご夫妻と合流し、高速を降りて、小布施町の曹洞宗寺院岩松院の天井画を見に行きました。その天井画は北斎(1760-1849)の最晩年の肉筆画とのことで楽しみでした。北斎と言えば、富嶽三十六景の木版画で魅了されています。庶民の姿と共に、流れる風を感じさせる力強い躍動感と研ぎ澄まされた構図で、フランス印象派にも影響を与えた絵師です。



岩松院の本堂の天井には朱、鉛丹、石黄、岩緑青、花紺青、藍などの鮮やかな「八方睨み鳳凰図」の巨大な絵が描かれていました。これが北斎かと驚きましたが、北信濃さっての文化人高井鴻山が北斎を招いたとのことです。後



で調べてみると、小布施町と北斎の関係は濃く、小布施町の御神輿にも北斎が絵を描いていました。その天井絵の周囲には12cm幅の縁絵が金箔を地にして描かれ、天使のような羽のある子どもが蓮の花をもっている絵もあります。キリシタン禁制の時であっても、天使のような姿を描くなど、信濃の山奥では北斎は自由な気分になったのでしょうか。なぜかこの寺に蛙も集まり、蛙合戦があるといわれています。一茶(1763-1827)もこれを見に来て「やせ蛙 負けるな一茶 これにあり」と詠んだ句碑もありました。自然と芸術がのびのびと交わった文化がここにあると感じました。

小布施は実りの秋の真っ盛りでした。収穫の終わった葡萄畑、実もたわわな林檎、柿の木畑を通り抜けて走りました。小布施に来たからには、名物の栗おこわの老舗に立ち寄りましょう。黄金色の甘い栗が載っている艶々ご飯ときのご汁御膳を頂きました。



我が目指す宿の越後屋は角間温泉にありました。明治時代に創業し、その建物をいまだに使用している宿です。源泉かけ流しで温度は60度以上のため、9割の湯を外に流し、一割を適温になるように冷まして使っているといます。吉川英治が1年以上も逗留して、執筆



した部屋に仙人夫妻が入りました。街道すじに、源泉が違う共同浴湯が3軒もあります。宿の女将に「この先は行き止まり、熊が出るから、遠くへは行くな、三種類の源泉の風呂の違いを楽しんで」と言われました。源泉かけ流しの醍醐味です。夜には、地酒、地元の食材を使った御馳走を楽しみました。